青少年育成センターだより

第１２１号　２０２１．１０．１５

防府市教育委員会生涯学習課
青少年育成センター
０８３５－２３－３０１３

先月の９月で、緊急事態宣言が解除され、少しずつですが私たちの社会生活も落ち着いてきていますが、子どもたちにも感染しやすくなった新たなコロナが発生し、子どもから親に感染するなど、大変な状況はまだまだ続いています。コロナ禍での生活は子どもたちへ身体的にも精神的にも大きく影響していると言えるでしょう。私たち大人は、子どもの少しの変化に気付いてやることが大切です。気になれば、声をかけたり、一緒に遊んだりすることで子どもを元気にしてやりましょう。自分は親に守られているのだという安心感が生まれ、たくましく生きていけるのです。

世界に目を向ける

ここで世界の様子についてみてみましょう。

「誰もが家族や友人の感染を目の当たりにしました。救急車のサイレンが一晩中鳴り響き、人々は酸素ボンベを求めて病院に押し寄せています」

これは、ユニセフのスタッフが今年５月に報告したインドの首都ニューデリーの情景です。わずか２ヶ月間で６００人近くのコロナ孤児を生んだ現地の第２波は、ユニセフによる数千台の酸素濃縮器の投入や、国際社会からの支援も得て、どうにか鎮静化していきました。しかし、同様の非常事態は今も世界各地で発生し、さらに、一度鎮静化した地域でも２度、３度と感染拡大が再燃、そのたびに人々の命が失われ、日常が破壊されています。・・・

・・・一年半にわたるコロナ禍は、子どもたちの生活のあらゆる側面を悪化させています。大勢の子どもが親を亡くし、保護を必要としています。世界の貧困率は２５年ぶりに上昇、満足に食べれない子どもが急増しています。休校措置により教育の機会を奪われている子どもは１億５０００万人以上にのぼります。・・・

・・・パンデミックは世界に激震をもたらし、子どものための保健・福祉・教育サービスを著しく傷つけています。昨年、通常医療の中断によって命を落とした子どもは、南アジアだけでも約２３万人にのぼります。経済的な困窮により児童労働を強いられる子ども、栄養不良に陥る子ども、学校に通えない子どもも急増しています。・・・

【Ｕｎｉｃｅｆ（国際連合児童基金）の広報誌より】

日本もコロナ禍の大変な状況で、なかなか他の国のことに目を向ける余裕がなくなっているのですが、他国のことを知るということは大切なことだと思います。

世界に目を向けると、記載されているように、もっと大変な状況の中で生活をしている子どもたちがいるのです。このことをみなさんの子どもたちにも話してやってください。「今大変な思いをしているのは、お前だけではないのだよ。このような大変な状況の中で他国の人たちが一生懸命に生きようとしている。お前も負けるな」と・・・。

日本に住む私たちだけが、コロナが収まり、これまでと同じ生活が送れるようになることはできません。国際交流が盛んになった今では、自国だけでの安定を望むことはできません。他の国のことを思いやり、他の国が困っていれば手を差し伸べることが大切です。そのような話を子どもと一緒に話すことは、これからの国際社会を生きていく子どもたちにとって大切な力になるのだと考えます。

（文責＝青少年育成センター指導員　藤村）